



筑紫女学園大学リポジト

名詞とカテゴリー — 一可算・不可算・数の一致 —

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/305

名詞とカテゴリー —可算・不可算・数の一致—

緒方 隆文

Countability and Number Agreement with Category Types

Takafumi OGATA

0. はじめに

世界はささいな違いまでいれれば、限りない多様性の中にある。この多様性を人はそのまま受け入れるのではなく、捨象という方策によって世界を認識してきた。捨象とは、とりたてる要素以外を対象から切り捨てることである。つまりいくつかの違いは切り捨て、無視することで理解する。

この捨象はカテゴリーを作るときに、重要な働きをする。何らかの違いを必ず持つもの同士を、一つのカテゴリーにまとめるために、捨象することではじめてまとめあげることができる。いくつかの属性をとりあげ、それ以外の属性は切り捨てることでカテゴリーを作るのである。さらにこの捨象という方法を背景化という操作に発展させ、カテゴリーの境界を定めている。捨象(背景化)することではじめてカテゴリーの境界線が定まっていく。名詞は、このカテゴリーが最も深く関わると考え、カテゴリータイプを通して、名詞の可算・不可算・数の呼応の問題を取り上げていく^{註1}。

本稿の目的は、名詞をカテゴリータイプに分類し、そのカテゴリータイプを通して名詞の可算性及び数の一致を考察することにある。各々の名詞は必ずしも一つのカテゴリータイプに限定されない。複数のタイプがあったり、複数のタイプの特性を兼ねる場合がある。以下1節でカテゴリーとプロトタイプを考察し、2節でカテゴリータイプを提示する。3節で可算・不可算を見て、4節で集合名詞を通して数の一致を考察する。最後に5節でカテゴリー間の推移を見る。

1. カテゴリーとプロトタイプ

カテゴリーにはプロトタイプ効果があり、各々の成員が持つカテゴリーの帰属性には差がある。そのため周辺成員は様々な要因により、カテゴリーの成員になったり非成員になったりする。

つまりカテゴリーの境界線は基本ははっきりしない。しかし境界線がはっきりしないといっても境界がなければ、他カテゴリーと区別できない。そのため何らかの基準が必要となる。しかし古典的カテゴリー論のように素性すべてを持つか持たないかではなく、主観的な距離感によって成員と非成員を区別していると考えられる。

距離感とは、プロトタイプの成員が持つ属性 (attributes) からの距離感になる。つまり典型的な属性から遠い属性をもつものを背景化し、非成員とするのである。この距離感は主観的なものなので、境界線もあいまいなものとなるが、遠い距離感が感じられれば非成員とみなされる。中心に存するプロトタイプで判断基準となる属性は一つとは限らないし、そもそもプロトタイプとなる成員も一つとは限らない。例えばカテゴリー <game>などは、中心となる属性が数多く存在し、それらが交互に背景化 (別の見方をすれば焦点化) され、ゆるやかな集合体をなす。そのため一見すると関連性が薄いものまで一つのカテゴリー <game>に属することとなる。このように中心となる属性の数や明確さの度合いに応じて、その境界線のぼやけ方が異なると考えられる。

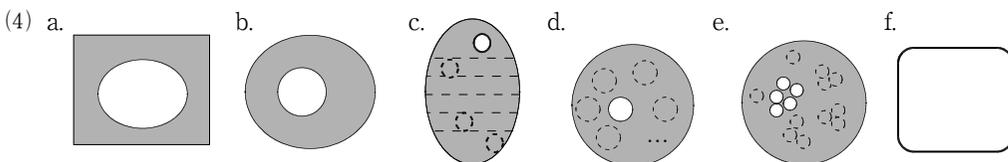
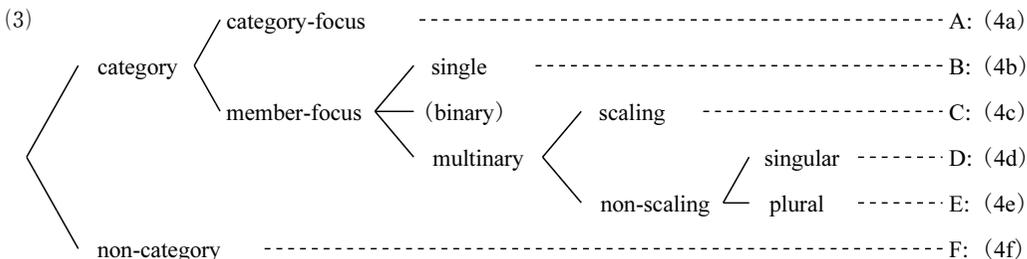
さらにこの境界は一定ではない。縮小したり拡大することができる。(1)は縮小した例で、(2)は拡大した例になる。((1a) (2a) はTaylor 1995:77)

- (1) a. Strictly speaking, rhubarb is a vegetable. b. ネズミをとってこそネコである。
 (2) a. Loosely speaking, a telephone is a piece of furniture. b. 広くとらえれば、正解である。

2. カテゴリータイプ

本稿では名詞をカテゴリーの観点から分類し、その特性を考察していく。すなわち名詞をカテゴリータイプによって分類する。このカテゴリータイプは、各々の名詞に固有のものではなく、用法や意味に応じて、異なるカテゴリータイプをとることができ、一つのカテゴリータイプから別のものへと推移または転化することもある。

分類の全体像を(3)に示す。全部で6タイプあり、図示したものが(4)になる。楕円はカテゴリーを、楕円の中にある小円は成員を表す。白い部分に焦点があたっており、灰色は背景化された部分である。この分類の説明を以下に行う。



名詞をカテゴリーの観点から分類するにあたり、まず最初はカテゴリーと関連づけられているものと、そうでないものに分ける。関連づけられているものをcategoryタイプ、そうでないものをnon-categoryタイプと呼ぶ。カテゴリーは属性の主観的距離感によりまとめられたものであるので、カテゴリータイプは何らかの属性と関連づけられている。一方非カテゴリータイプは、そうした属性とは関係なく存在する。そのため属性によって規定されない。非カテゴリータイプの代表例が固有名詞となる。

カテゴリータイプはさらに、内部成員が主観的に見えるか見えないかで2つに分かれる。内部成員が主観的に見えない場合、カテゴリー全体に焦点が当たっている。つまり単一体としてのカテゴリーに焦点をおくため、中の成員が主観的に見えない。これは他のカテゴリーとの差異化において典型的に起こるタイプになる。例えば(5)において「男」は「女」を、「女」は「男」を背景化することでカテゴリーが定まる。この時、カテゴリーの中の成員は見えない。このようにカテゴリー全体に焦点があたるカテゴリータイプをcategory-focusタイプと呼ぶ。

(5) 男は男、女は女。

一方主観的に成員が見える場合は、カテゴリー全体ではなく、中の成員に焦点があたる。そのためこのタイプを、member-focusタイプと呼ぶ。このmember-focusタイプはその成員の数により3つに分けられる。成員が主観的に1つの場合singleタイプ、2つの場合binaryタイプ、3つ以上の場合multinaryタイプと呼ぶことにする。singleタイプの例として、the sun, the moon, the president, the weather, tell the truth (cf. tell a lie) などがある。それらはカテゴリー内に主観において一つしかない。binaryタイプは否定などに関わるカテゴリータイプ^{註2}で、名詞においては直接関わらないので本稿では深くふれないこととする。最後に3つ以上の成員を持つmultinaryタイプであるが、これがmember-focusタイプでは普通のタイプになる。このmultinaryタイプはさらに尺度を感じるかどうかで2つに分かれる。尺度が感じられるものをscalingタイプ、感じられないものをnon-scalingタイプと呼ぶ。カテゴリーにはプロトタイプ効果があるために基本すべてのカテゴリーには何らかの尺度が存在する。しかし尺度を主観的に意識するかしないかで、タイプが分かれる。意識する場合プロトタイプの度合い (<らしさ>の度合い) の違いを意識しているか、またはそれ以外の尺度を措定している場合にあたる。意識しない場合は尺度があろうがなかろうが、主観的には尺度は見えない状態にある。さらにnon-scaling type は焦点があたるもの数により、2つに分けられる。カテゴリー内の一つの成員に焦点があたる場合、singularタイプと呼び、二つ以上の成員に焦点があたる場合をpluralタイプと呼ぶこととする。

背景化の方法であるがcategory-focusタイプは、カテゴリーの外を背景化することにより、カテゴリーの境界線を定める (外部背景化: external backgrounding)。一方member-focusタイプでは、カテゴリー内の他の成員を背景化している (内部背景化: internal backgrounding)。そのため背景化の仕方がcategory-focusタイプとmember-focusタイプでは異なることになる。

さてここでゲシュタルトの観点から、category-focusタイプとmember-focusタイプを考えたい。成員が見えないcategory-focusタイプでは、カテゴリー自体が一つのゲシュタルトとして認識さ

れる。成員または構成素自体が必ずしも見えていないわけではないが、一つのゲシュタルトとして認識されることはない。そのためcategory-focusタイプでは、成員または構成素一つ一つが、ばくぜんとしており個々の構成素に明瞭な境界もなく単なるかたまりと認識される。例えばriceが不可算用法なのは、waterなどと同じく中の成員が主観的に見えておらず、全体に焦点があたるからである。

一方主観的に成員がみえるmember-focusタイプでは、各成員一つ一つがゲシュタルトとして認識される。単なる物量としてのかたまりではなく、各成員がゲシュタルトとして焦点が当たることになる。例えばgrainなどはriceと似ているが、個々の成員が主観的に見える（焦点があたっている）ため、可算名詞となる。また普通名詞house, manなどのようにいくつかの部位／部品(屋根、壁、柱、床等；頭、胴体、腕、足等)でさらに細かい構成素があるとしてもすべて捨象し、名詞が表すそのものがゲシュタルトとしてなっているものもある。

ただしpluralタイプ（タイプE）においてはグループに焦点があたっており、このグループがゲシュタルトと認識される。まとめるとゲシュタルトレベルは(6)に示すように3つあることになる。対応するタイプを括弧内に示す。

- (6) a. 個体レベル（タイプB、C、D） c. カテゴリーレベル（タイプA）
b. グループレベル（タイプE）

ちなみにゲシュタルトは意味的なものに限らない。例えば(7)ではシャンプーがシャブナーとなっている。しかしながら文脈の助けもあり、早読みすればシャンプーと解読される。これはシャンプーという文字の連続がゲシュタルトとして認識されており、それに符合するように解読がなされるからと考えられる。

(7) お風呂に入るとそこにはせっけんとシャブナーがあった。

3. 可算と不可算

名詞には可算／不可算の区別がある。しかしこの区別は名詞そのものに固有のものではなく、ときに可算、ときに不可算といわば用法にすぎない。固有名詞、物質名詞、抽象名詞など普通は不可算のもので、(8)のように可算扱いになることがある。また通例可算の普通名詞であっても、(9)のように不可算扱いになることがある。

- (8) a. He is the nearest we have to an English Leonardo da Vinci. (Berry 1993: 64)
b. A tea made from the leaves is used as a beverage. –G. B. Grinnell, *The Cheyenne Indians*.
c. I felt a sickening shock in the pit of my stomach. –Jack London, *The Sea-Wolf*.
- (9) Mix the cabbage, carrot, and apple, and add enough salad cream. –H. McGrath, *All about food*.

したがって普通名詞、抽象名詞といった分類では、可算／不可算を扱えないし、一つの名詞を可算／不可算に振り分けることもできない。本稿ではカテゴリーの観点から、可算・不可算を

論じる。すなわち可算／不可算はカテゴリータイプの違いによって決まる。結論を先に述べれば、multinary non-scalingタイプ（タイプDとE）の時のみ可算名詞で、それ以外はすべて不可算名詞となる。具体的に見ていきたい。先ほどの(8)の名詞は、すべてこのタイプに属する。(8a)ではLeonardo da Vinciの特性を持つ人達、(8b)では様々の種類があるお茶、(8c)では様々な種類のshockがmultinary non-scalingタイプのカテゴリーになっており、各々の名詞はその成員に属している。そのため可算となっている。

一方それ以外のカテゴリータイプをとるものは、すべて不可算となる。(9)のappleなどはタイプDではなく、タイプAになっている。つまり材料として物質化しておりカテゴリーが異なる。そのため不可算となる。形があるものが可算になると言われることもあるが、切り刻んだappleでさえ、形はある。しかし不可算になるのは、それらが単に分量の違いであって、ゲシュタルトと認識されないからと考える。つまり同質のものが単に切り分けられたものと認識される。この場合、カテゴリーの成員となることはできない。

同質のものから成り立つ物質名詞のような特性を持つdot, stoneなどは、大きさも形も定まらないが、それぞれがゲシュタルトと認識されるため（単に物量として切り取ったものではない）、タイプDのカテゴリーの成員と見なされ、可算名詞となっている。

可算／不可算の違いは、その名詞を主体がどのように認識するかによって決まる。もっと言えば、どのカテゴリータイプと見なすかということであり、ゲシュタルトの概念と強く結びついてある。このカテゴリータイプと、数の一致について集合名詞を通して次節で見る。

4. 集合名詞と数の一致

前節で可算／不可算を見たが、ここでは動詞の数の一致を集合名詞を通して考察したい。まず集合名詞とカテゴリータイプとの関係を見て、その後で数の一致について考える。

集合名詞は、特定のグループに属する人や物の集合体を表す名詞である。これには、family, team, committee, board, people, police, cattle, furnitureなどの名詞があるといわれている。しかしそれらは(10)の3点で振るまいが異なっており、(11)のように分類される（cf. 久野・高見 2009: 82）。

- (10) a. 単数名詞の前にmany または数詞のみをおき、成員の数量を表すことができる。
 b. 複数形にすることで、その集合名詞が表す集合体が複数あることを表すことができる。
 c. muchをつけることでその集合体の分量が多いことを表すことができる。

(11)

	数詞/manyで成員数	many/数 + N-s	much + N	具体例
type 1	○	×	×	people, police, cattle, etc.
type 2	×	○	×	team, family, committee, etc.
type 3	×	×	○	furniture

これらtypeの違いはカテゴリタイプに帰因すると考えられる。type 1は久野・高見（2009）が述べるように、複数可算普通名詞と考えられる。つまり集合名詞ではなく、複数のみを表す普通名詞と考える。なぜなら(12)のように成員の数やmanyを前に置くことができ、(13)にあるように数えることができない。また(14)のようにmuchをつけることもできない^{註3}。もともと複数であるため、さらに複数の-sが付加されることもない。これはgeeseやcowsといった複数可算普通名詞と同じ振る舞いである。久野・高見（2009: 75）が述べるようにこれら単語は「仕切りのある集合体を形成」しないため、明確な形や境界をもたない。こう考えるとき、カテゴリタイプはタイプEとなる。

(12) a. five people, many people

b. two police, many police

c. two cattle, 500 cattle, many cattle

(13) a. *a cattle, *two cattles, *many cattles

b. *a police, *two polices, *many polices

(14) *much people, *much police

(註3) (12) (13)は久野・高見 2009: 69-75)

一方成員の数を単数名詞の前につけて表せないtype 2は、一つ一つが「仕切りのある集合体を形成し」ており、(15)のように集合体自体を数えることができる。そのためこれらを集合名詞と考える（cf. 久野・高見2009）。集合体を一つの名詞と考えるとき、カテゴリタイプはDになる。成員数を表すとき、(16)のように数詞を単数名詞の前におけず、別様に表現する。むしろmuchを付加できない（(15) (16)は久野・高見2009: 70, 92-3）。

(15) a. a crew, two crews, many crews

b. a staff, two staffs, many staffs

(16) a. *eight team, *many team, *much team; *ten group, *many group, *much group

b. eight team members, eight members of the team; ten group members, ten members of the group

さらにfurnitureのようなtype 3は、不可算であって物質名詞のような特性をもっている。このときカテゴリタイプはAになっており、中の成員が主観的に見えない。そのため物質名詞同様、一つ一つの成員を数えるとき、pieceなどを用いて表現し、manyではなくmuchでその分量を表現する。

しかしながらこのタイプ分けは、その名詞に絶対的なものではない。確かに一つのカテゴリタイプしかとらないものもあるが、基本意味・用法に応じて、異なるカテゴリタイプをとることができる。久野・高見（2009: 106-7）の記述をもとに、カテゴリタイプを振り分けたものが(17)–(21)である。名詞は複数のタイプをとることもできる。

(17) type 1（タイプE）のみ：people（人々）、police（米語ではtype 3）^{註4}

(18) type 2（タイプD）のみ：team, family, committee, crowd, audience, people（国民、民族）、etc.

(19) type 3（タイプA）のみ：furniture [例：much furniture], etc.

(20) type 1 / type 3 の両方：cattle, etc. [例：type 1～ two cattle, many cattle;
type 3～ much cattle]

(21) type 1 / type 2 / type 3：staff, crew [2語ともtype 1は主にイギリス英語、米語はまれ], etc.

次に動詞の数の一致について考察する。動詞は単数名詞には単数で呼応し、複数名詞には複数で呼応するのが基本である。しかしながら形と動詞の呼応にずれが生じる場合がある。集合名詞もその一つで、単数名詞であっても動詞が単数扱いになるものと複数扱いになるものがあるからである。

(22) a. The committee has not yet come to a decision.

b. The committee have not yet come to a decision. (Huddleston and Pullum 2002: 501)

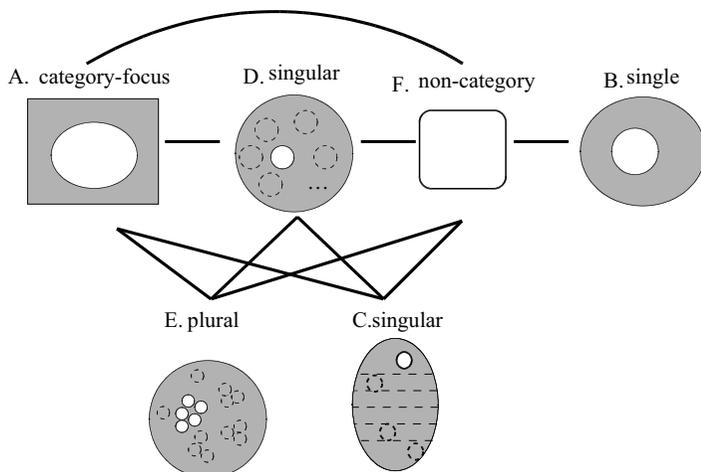
(22b)が複数呼応となっているのは、単一体でありながら中の成員が見えるためである。しかし中の成員が見えつつ全体に焦点があたるカテゴリータイプは(3)にはない。とはいえad hocにタイプを追加することも際限なく統一性がない。そのためカテゴリーが推移すると考える。具体的には(22b)は複数の成員(タイプE)を、グループ化し一つの集合体(タイプD)とみなす過程が働いていると考える。決定詞及び単数名詞は最終タイプDに呼応し、動詞の数は起点であるタイプEに呼応していると考えられる。名詞が単数か複数かではなく、どちらにより焦点があたるかによって動詞の数が決まる。(22b)の場合ゲシュタルトが2つあり、一つは単一体レベルともう一つはその成員レベルがある。主観的に成員レベルにより焦点があたっているため、動詞は複数呼応となる。

このようにカテゴリータイプは、推移することがあり、そのため2つ以上のタイプの特性を重ね持つことがある。次節でこの推移をさらに見ていくこととする。

5. カテゴリー間の推移

前節の集合名詞で見たように、名詞は一つのカテゴリータイプにとどまるのではなく、そこから他タイプに推移することがある。しかしこの推移には方向性があり、ある程度の制約がある。それを示したものが(23)になる。太い実線を通り推移がおこる。中心となるカテゴリータイプはA、D、Fで、一部Bを除いて他のすべてとつながる。一方周辺的なタイプB、E、Cは、A、D、Fまたはその一部とつながる。ただしつながっているからといって必ずしも双方向とは限らない。

(23)



以下の節で具体的なカテゴリーの推移を見るが、その前にいくつか確認しておきたいことがある。まず一つめに、数の一致の問題がある。動詞が単数呼応か複数呼応かの違いは、推移がない場合そのカテゴリータイプで決まる。一方推移がおこる場合は、結論から述べれば、起点から終点までの一連のタイプの中に複数呼応のタイプがあり、かつ全体より成員に主観的に焦点があるときのみ複数呼応となる。つまり推移しても複数呼応タイプがなければ複数呼応にならないし、あったとしても例えばthe United States of Americaのように各成員ではなく全体により強く焦点が当たれば単数呼応となる。

次に推移と転化の違いがある。推移とは起点から着点までの複数のカテゴリータイプの特性を合わせ持つものをさす。それは属性であったり、時には動詞の数の呼応であったり、名詞の単数/複数という形であらわれたりする。一方転化は、そのものに対する見方が変わったために、別のカテゴリータイプをとるものになる。この場合1つのカテゴリータイプの特性のみを持つ。これはあくまで主観的な見方によるものなので、客観的にももの特性が変わったわけではない。とはいえ転化それ自体も、主観による見方にすぎない。その名詞に典型的なタイプがあり、そこから転化して周辺の別タイプになると見なしているからである。つまりこうしたプロトタイプの度合いが弱ければ、転化と言わずに単に複数のカテゴリータイプをとるとなるにすぎない。なお転化も推移と同じ方向性を持ち、(23)に従う。以下各タイプからの推移と転化を見ていく。

5.1 タイプAからの推移/転化

タイプAに属する名詞に代表的なものとして、物質名詞と抽象名詞がある。これらは必ずしもタイプAに属するとは限らず、タイプAからの推移/転化もある。まず物質名詞からの推移/転化を見る。一つめは、<種類>を表す場合である。これはその物質の属性を持つ一つ一つ異なる種類が成員となり、カテゴリーをなしている。物質そのものは何らゲシュタルトになることなく、種類という別観点からカテゴリーをなし、可算名詞となっている。2つのタイプの特性を持つことから、タイプAからDへの推移とみる。(以下下線はすべて著者)

(24) a. Here, now, Lily, just a drop of cognac in a little fizzy water. – Edith Wharton, *The House of Mirth*.

b. Steel is a trustworthy metal. – Thomas W. Duncon, *Gus the Great - A Novel*.

しかしながら種類を表すからと行って、必ずタイプDに推移するわけではない。(25)のように、タイプAのまま、subcategoryを表す場合もある。この場合カテゴリー間の推移がない。そのため可算名詞になることもなく、不定冠詞はつかない。

(25) a. This is very good wine. b. This coat is made of good cloth. (齋藤 1956: 134)

次に<部分>を表す場合がある。これは種類と似ているが、同質の成員からなるところが異なる。同質ではあるが、主観的には成員となる個体一つ一つがゲシュタルトと見なされている。lightであれstoneであれ、単にある分量の物質として存在するのではなく、形をもったゲシュタルトとしてそこに存在する。タイプDの特性のみを持つので、タイプDへの転化と考える。

(26) a. The rain poured down, and never a light showed. – M. Twain, *The Adventures of Huckleberry Finn*.

b. Are you sure I did not throw a stone? – M. Twain, *The mysterious stranger and other stories*.

またタイプAからEに推移するものもある。watersがその例で、水が集まったところという意味で海、湖、川、洪水などをさす。これは成員が漠然としたゲシュタルトをなしており、それが漠然と単一体をなしている。動詞は基本複数呼応であるが、単一体としての焦点が強ければ単数呼応となる。

(27) a. The waters are running out now.

b. The waters is divided into several narrow channels.

次に<製品>であるがこれもまた<部分>と同様で、ある属性を共有するカテゴリーが、個体としてゲシュタルトとして存在するために、タイプDへの転化と考える。

(28) a. To suppress a paper here involves the ruin of the publisher. – M. Twain, *The innocents abroad*.

b. For now we see through a glass; but then face to face. – *Corinthians* 13: 12

最後に<事件>がある。これは<種類>と同じで、ある属性をもった様々な種類のもの一つ一つが成員となり、カテゴリーを形成する。(29a)はタイプEへの推移、(29b)はタイプDへの推移となる。特性を合わせ持つため、タイプAからの推移が起こったと考える。

(29) a. I'm glad I came before and not in the middle of the rains. – Paul Scott, *The jewel in the crown*.

b. In the following year, the theater was destroyed in a fire.

次に抽象名詞からの推移/転化を見る。まずタイプAからEへの推移として、抽象名詞が集合名詞として働く場合がある (cf. 斎藤 1956: 187-8)。この場合抽象名詞の属性をもったものが成員となりカテゴリーをなす。両方の特性を兼ねることから推移とみる。

(30) aristocracy, youth, nobility, audience, company, acquaintance, poetry, prose, etc.

(31) a. The aristocracy are powerful in England.

b. The youth were instructed in military drill. (斎藤 1956: 187)

次にタイプCへの推移がある。(32a)は相当な技能、(32b)は美しいものの中の典型 (この場合人)を表している。ここには「らしさ(典型性)」の尺度が感じられ、その中でも典型的な成員をこれら名詞が表している。タイプAとCの特性を兼ねていることからカテゴリータイプCへの推移とみる。

(32) a. To reach it without a wetting required some skill and time. – Harriet Martineau, *Deerbrook*.

b. Don't address me as if I were a beauty. – Charlotte Brontë, *Jane Eyre*.

ちなみにsomeは、つく名詞の種類によってタイプを推移させたりしなかったりする。例えば

物質名詞であれば、someがついても分量のみ変化こそすれカテゴリータイプは同じタイプAにとどまる。また抽象名詞についてはタイプCへと移行し、普通名詞の場合は数量が変化するが、推移せず同じタイプDまたはEにとどまる。

- (33) a. Bring me *some water*. b. This requires *some skill*.
c. I want *some pens*. (斎藤 1956: 140)

ここで確認したいことがある。カテゴリータイプの推移であるが、二通りあることである。一つは名詞そのものがその見方によって、そのままの形でカテゴリータイプが推移するものがある。もう一つは決定詞など付加することでカテゴリータイプが変化することがある。someなどは後者にあたり、元のカテゴリータイプによって推移先が変化することとなる。

5.2 タイプBからの推移/転化

タイプBはカテゴリーの中に、主観的に1つしか成員がないものになる。the sun, the moon, the president, the weather, tell the truth (cf. tell a lie)などがそれにあたる。しかしこれはあくまで主観的なものになる。(34)のような例の場合、タイプBはタイプFへと推移し固有名詞となっている。名詞が大文字で書き始まっており両タイプの特性を兼ねているので推移と見る。

- (34) the Castle, the Bank of England, etc.

5.3 タイプCからの推移/転化

タイプCからの転化を見る。一つは単純に数字を尺度から切り離して用いる場合がある。(35)のsevenは、ばらばらに配置された主観的尺度のないカテゴリーに属する。

- (35) Seven was often considered a magic number. (織田 1994: 156)

またメタ言語否定で同じようなことがおこる。もともと尺度があるカテゴリーに属するものが、その尺度を否定することによりタイプDへと転化する。(36a)ではtwo hundred、(36b)ではthreeが本来タイプCに属しており、尺度を前提とする。そのため普通の否定では200または3を超える数字がすべて否定される。しかしメタ言語否定により前提となる尺度が否定されるため、それを超えるものを後付けで加えることができる。これはタイプCからDへと転化したためと考えられる。

- (36) a. His income is not *two hundred* a year, but at least *three hundred*. (Jespersen 1933: 243)
b. Max doesn't have *three* children - he has *four*. (Horn 1989: 384)

基本Cからの推移はないと考える。しかしタイプCから品詞転換が起こると考えている。この問題は紙幅の関係上、別稿にゆずることとする。

5.4 タイプDからの推移/転化

タイプDからの転化として代表的なものは、もともと形あるもの(ゲシュタルトとしてみなされていたもの)が、もとの形をなくした時である。(37a)にあるように食材、(37b)のようにもとの

形がなくなってしまう、ゲシュタルトとして認識されない。そのため、タイプDからタイプAへと転化がおこる。

(37) a. We're having salmon for dinner.

b. There was cat all over the driveway. (Huddleston and Pullum 2002: 337)

さらにタイプDのどんな名詞でも、タイプAに変える表現がある。それは「ある種の」の意味を表す a kind of, a sort of, a type of などの表現で、後続する名詞は不可算名詞へと変化する。これはタイプAの名詞をそのままタイプを変えずに数えるときの表現、a glass of, a piece of, a sheet of などの表現と対照をなす。前者は「可算名詞を不可算名詞化する言語手段」であり、後者は「不可算名詞を可算名詞化する言語手段」になる (安井 1983: 68)。

次にタイプDからFへの推移の例に、複合名詞等がある。例えば White House, Fifth Avenue, Big Bird などのように、もともとは白い家／5番街／大きい鳥というカテゴリーの一成員だったものが、固有名詞となりタイプFに推移する。この場合属性を引き継いだ形で、タイプFになっているので、タイプFへの推移とみる。

またタイプDからCへ推移するものに、(38)のような例がある。(38)は学者に典型的な属性を表しており、典型性の尺度が感じられる。両方の属性を兼ねており、推移と見る。

(38) It takes no scholar to read our documents. – James Fenimore Cooper, *The Water-Witch*.

5.5 タイプEからの推移／転化

複数成員が何らかの理由で単一体とみなされる場合、カテゴリータイプの推移がおこる。まず the United States of America, the United Nations, the Philippines, the Netherlands, the Balkans, のような国名がある。もともと複数の成員からなるために、複数形の-sを伴っている。複数成員に焦点があたることからタイプEが起点となり、その後単一体とみなされタイプFへと推移する。複数形の-sが残ったままで単一体になっており、特性を重ね合わせているので転化ではなく、推移にあたる。この場合動詞は(39)にあるように基本単数呼応となる。

(39) a. The United States of America is a member of the United Nations.

b. The Netherlands is a small country with around 15 million people.

しかしながら単一体になっても必ずしも動詞は単数呼応とは限らない。the United States of America みたいに強く単一体と感じられなければ、複数呼応になるものもある。単一体よりも成員の方により強く焦点があたっているからである。

(40) a. Today the Philippines are a member, in excellent standing, of the United Nations.

(LIFE. 1945年2月19日号)

b. The Alps are a great object of interest to all Europe. – H. W. Warren, *Among the Forces*.

Jespersen (MEG vol. II 5.12-18) の Unification of Plurals もここに入る。(41)の複数名詞は、単一体として解釈され単数扱いである。複数形を保っており、タイプDへの推移と見る。

(41) a. Fifteen years represents a long period of his life. (Quirk, et al. 1985: 758)

b. [This next two miles] isn't going to be difficult. (Huddleston and Pullum 2002: 354)

次にタイプEからタイプAへの推移を見る。これには2種類ある。一つは動詞が単数呼応する場合で、(42)に示すようにいくつか種類がある。(42a)は語源的に複数起因のもの、(42b)は病気、(42c)はゲーム類、(42d)は学問になる。これらはもともと複数成員から成るものであったため、複数形の-sがついている。しかし主観的に成員より単一体の方に焦点があたるために、タイプEからタイプAへと推移している。単一体に焦点があたるため、単数呼応となる (cf. 久野・高見 2009: 18-25)。

(42) a. news, etc.

b. measles, hives, shingles, mumps, rabies, etc.

c. cards, checkers, darts, dominoes, ninepins, etc.

d. politics, statistics, ethics, acoustics, etc.^{註5}

二つめは、動詞が複数呼応する clothes, goods, troops, woods, surroundings, oats といった語がある。これも複数成員 (タイプE) が、ゆるやかな集合体 (タイプA) を構成する。というのも成員は様々な種類のものから構成されているからである。しかし単一体より、成員の方に主観的に焦点がおかれるため、(42)と異なり動詞は複数呼応となる^{註6}。

(43) a. Clothes are a deliberate indication of lifestyle and attitude. – Ron Hoff, *I can see you naked*.

b. Goods are a means with which the group can rethink itself. – D. McCracken, *Culture and consumption*.

これと似た名詞に、2つの部分からなる単一体または集合体がある。これには2種類あり、2つを切り離せないもの(44)と切り離せるもの(45)がある。

(44) This pair of pants is his favorite. (45) The first pair of shoes is essential and important.

これらはどちらも複数の成員 (基本、対になる2つ) に焦点があたり、単一体／集合体となる。特性を兼ね備えるためタイプEからAへの推移と考えられる。単一体の方へ強く焦点があたるので数を数える場合、a pair of などの表現を加え、いわば切り取るような形で表現する。A pair of を加えた時は動詞は単数呼応になるが、それ以外 these shoes / pants など複数呼応になる。しかしながら切り離せるものはタイプDの場合もある。これは推移でも転化でもない、単にそのタイプをとれるにすぎない。対でなければ、three left-foot shoes のように、three pairs of の表現を使う必要はない。

もう一つの類例として複数個体と連続体の変換がある。Lakoff (1987) や山梨 (1995) が指摘するように <複数個体> → <集合体> → <連続体> という認知作用が認められる例がある。

(46) a. He poured the juice through the sieve.

b. The fans poured through the gates. (Lakoff 1987: 441)

(47) a. 汚水が川に流れ込んだ。 b. 群衆が会場に流れ込んだ。(山梨 1995: 125)

(46b) (47b)のThe fans / 群衆は複数個体から連続体へと変換が進んでいる。しかし本稿の立場からすれば、タイプEからAへの推移の一例にすぎない。しかも(48)に示すように複数呼応になっている。つまりタイプEとAの両方の特性を兼ねているため推移となる。

(48) The fans pour through the gates and curse around the graves. –*Billboard*. 1977. 89(51): 158
次にタイプEからタイプDへの推移を見る。(49)の表現は、複数のものを一つにまとめあげ、そのまとめあげた種類を名詞で表現している。

(49) a bunch of, a set of, a group of, a party of, a class of, a crowd of, etc. (ofの後は複数名詞)

複数のものには、一つになる強い理由はないため、その結合はやや弱いものと考えられる。複数のものを一つのグループにしていることから、タイプEからAへの推移が起こっていると考えられる。このとき動詞の呼応は(50)に示すように、単数呼応も複数呼応も両方ある (50: 久野・高見 2009: 49)。

(50) a. A set of rules is inevitably imperfect.

b. A set of rules are used to select the possible treatments.

単一体と主観的に見なされれば単数呼応、複数成員が強く意識されれば複数呼応となる。とはいえ一定の傾向があり、人の場合、例えばa bunch of hooligansの場合、複数呼応が普通である。基本主観的な見方に左右されると考えられる。

5.6 タイプFからの推移／転化

タイプF (固有名詞^{註7}) からの推移として、まずタイプDへの推移がある。(51)のように何かの属性を持つカテゴリーを想定し、その成員とみなされるとき、普通名詞化しタイプDへと推移する。転化とも考えられるが、名詞が大文字で書き始められており特性を兼ねているので推移と見る。小文字で書かれるmackintosh, boycott, sandwichなどとは区別される。

(51) a. a Mr. Brown; a Ms. Willard, etc. b. a Sony; a Ford; a Hokusai(北斎), etc.

c. a Times; a Daily Gleaner, etc. d. a Taira(平一族の一人), a Buddhist, a Japanese, etc.

(51a)は人名がタイプDになっており「~の名前を持つ人 (~という人)」がカテゴリーを形成しその成員を示している。(51b)は作品・製品で、その作者あるいは製造者の作品・製品というカテゴリーに属する。(51c)はbと似ているが、雑誌など共通のタイトルをもつものがカテゴリーとなり、各部が成員となる。(51d)は民族・家族・等は等に所属する個人をさすもので、それらがカテゴリーとなり名詞はそのカテゴリーの成員となる。

またタイプFからタイプAへと推移する例として(52)のような例がある。本来その名を有する本人／実体があつsalientな属性がカテゴリーとなっており、タイプAとなる。

(52) a. They had *no Homer* to embalm their deeds. –W. Davis. 2009: 148, *History of Whiteside County*.

b. There is *no Cicero* or *Quintilian* among them. –Clarke & Berry. 1996: 206, *Rhetoric at Rome*.

c. Japan ought to be *the Switzerland* of the Pacific. (斎藤 1956: 89) (イタリック体は著者)
次にタイプFからタイプCへの推移を見る。この場合プロトタイプ効果を主観的に意識しており、タイプCへと推移する。例えば53のthe Londonは I にとって典型的な属性/状態のLondonであり、そこには尺度が感じられる。

53) This isn't *the London* I used to know. (Berry 1993: 65)

すべてのカテゴリーにはプロトタイプ効果が基本あり、典型的な成員と周辺的な成員が存在する。しかし主観的にこのプロトタイプ効果を意識するかしないかでカテゴリータイプが異なる。意識する場合タイプCになり、意識しない場合タイプDまたはB、Eになる。タイプAは成員は主観的に見えないし、タイプFはカテゴリと関係ないのでプロトタイプ効果とは実質関係ない。

タイプFからEへの推移は基本ないと考える。むろん54のように複数になることもあるが、これはタイプDの延長であって、タイプEのように何らかのグループをなしているとは考えにくい。

54) The world has produced few Miltons or Shakespeares. (斎藤 1956: 90)

6. おわりに

本稿では名詞をカテゴリータイプの観点から考察した。カテゴリータイプによって、可算/不可算、数の一致等が説明されるとした。また名詞は複数のカテゴリータイプをとることもできるし、時にはカテゴリータイプは他タイプへと推移したり転化することを見た。名詞の品詞転換、名詞修飾とカテゴリーの関係、構文とカテゴリーの関係など紙幅の関係で論じることができなかったものは、別敲にゆずりたい。

注

注1. カテゴリーの概念は、名詞に限定されない。否定、とりたて詞、同族目的語、トートロジー、総称文などもカテゴリーで説明される(緒方2006a,b, 2008, 2009)。

注2. Ogata (2009) を参照のこと。

注3. peopleは国民・民族の意味の場合、a people, two peoplesと数えられる。またcattleはmuch cattleが許される。前者は意味が異なり、後者はcattleを単一体と見なし物質名詞化している。そのためどちらもtype 1とは別の用法と考える。

注4. 国連の文書にtype 3の用例がある (Secretary-General SG/SM/12536: 12 October 2009)。

i) More and more leaders appreciate *how much police* do to restore stability following war.
(<http://www.un.org/News/Press/docs/2009/sgsm12536.doc.htm>, 2010/5/2)

注5. 久野・高見 2009: 22-6で述べるように、(42d)は学問以外の意味では複数呼応となる。

注6. goods, belongings等は数詞と共に起せず、manyとは共起する(久野・高見 2009: 15)。

注7. 固有名詞のタイプはEのみではなく、4種類ある。詳しくは緒方(2009)を参照のこと。

参考文献

Berry, R. 1993. *Articles*. London: HarperCollins

Horn, L. R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: University of Chicago Press.

- Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto. 1909-1949. *A modern English grammar on historical principles*. London: George Allen & Unwin.
- . 1933. *Essentials of English grammar*. London: George Allen & Unwin.
- 久野暲・高見健一, 2004. 『謎解きの英文法—単数か複数か』東京: くろしお出版.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things. What Categories Reveal about the Mind*. Chicago University Press.
- 織田稔, 1994. 『直示と記述同定: 英語固有名の研究』東京: 風間書房.
- Ogata, T. 2009. "Articles as Categorical Markers," *Journal of Chikushi Jogakuen University and Junior College*, Vol. 4, 1-18.
- Ogata, T. 2010. "Figure-Ground Reversal in Negation," *Journal of Chikushi Jogakuen University and Junior College*, Vol.5, 29-46.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 斎藤秀三郎原著, 松田福松訳編. 1956. 『名詞用法詳解』東京: 吾妻書房.
- Taylor, J. 1995. *Linguistic categorization*. Clarendon press, Oxford.
- 山梨正明, 1995. 『認知文法論』東京: ひつじ書房.

(おがた たかふみ: 英語学科 教授)